

軽井沢の別荘泊 2019



2019年8月

旅のチカラ研究所 植木圭二

友人の軽井沢の別荘に仲間たちと行ってきた。さすがに猛暑を避けて軽井沢には多くの人々が来ている。人気避暑地での別荘ライフはとても快適で、さらに人生初のカーリングも体験できた。そして新たな試みとして今回は写真の掲載をしない旅行記に挑戦してみる。

■軽井沢は大混雑

私が昔勤めていた会社の先輩が軽井沢に別荘を持っているというので、先輩たちや同僚たちと真夏の軽井沢の週末を快適な別荘で過ごすために車2台でやって来た。

しかしながら私たちの車は軽井沢の街の中で大渋滞にはまっている。とにかく車が多く、それも品川や横浜といった首都圏ナンバーの車が圧倒的に多い。

それらの車が向かっている先は軽井沢で一番大きいスーパーマーケットで、別荘族が食料を買い込むために来店しようと渋滞している。ご多分に漏れず私たちも同じ店に向かっている。

私も軽井沢には比較的頻繁に来ているが、混雑を避けてこの時期にはあまり立ち寄ったことがない。今日は土曜日、人によっては9連休の初日になるので混んでいるのは当たり前だろう。

ある程度の混雑は予想していたが、予想をはるかに超えている。やはり軽井沢は違う。

ようやくスーパーマーケットの中に入るが、店内も相当に混雑しており年末の上野のアメ横のようになっている。特にBBQ（バーベキュー）の材料には人が集まっている。

その中でも野菜が相当安い。地元の長野、隣県の群馬は野菜の産地で安いのは当たり前だが、都会人が見るとびっくりするような値札を付けている。これは戦略的に安くしているのだろう。

肉やソーセージ、魚貝類も品揃いが豊富だ。お客は野菜の値段に驚いて、そのイメージでいろいろ買い込み結局は高級な肉類もどんどん買っている。

次から次に商品が出てくる。店は天気予報を気にしながらも相当多くの商品を仕入れたのだろう。お客の志向を完全に読んでいるあたりは実に商売上手で、商売のコツを知っている。しかもお客の側も安い安いと喜んで買って行く。完全にWin-Winの関係になっている。

それにしてもさすがに軽井沢だ、驚くような高級牛肉が飛ぶように売れているのが印象的だ。

■広がる軽井沢

神奈川県の相模湾沿岸は湘南地方と呼ばれている。断っておくと湘南という市町村も地名もない。ただ湘南という言葉の響きがいいので、いろいろな業者や団体が湘南を使っている。だから湘南は限りなく広がって、今はどこが最初に湘南と呼ばれたのか分からなくなっている。

軽井沢も似たようなことが起きている。しかし長野県軽井沢町はこの町だけのはずだ。

江戸時代、軽井沢は中山道の宿場町として栄えていた。その中山道は現在の国道18号線よりも北の方にあって、昔の碓氷峠も現在の碓氷峠よりも3kmくらい北にあった。明治になって国道18号線が整備され、道路とほぼ平行して走る信越線の軽井沢駅が1888年に出来た。

そのために軽井沢駅付近を新軽井沢と呼ぶようになり、昔の宿場街付近を旧軽井沢と呼ぶようになった。こうしてまず旧軽井沢と新軽井沢が生まれた。

軽井沢駅から旧軽井沢を經由して草津温泉までの55kmを結ぶ草軽電鉄が1915年に開業した。残念ながら1962年で廃業するが、今もあれば首都圏から草津温泉へのアクセスは軽井沢経由が主流になっていたはずだ。私としては本当に残念で、いつかは廃線跡を歩いてみたい。

その沿線の群馬県吾妻郡長野原町に地藏川という集落があり地藏川駅という駅があった。その駅が1927年に北軽井沢駅へと改称され、この駅を中心に北軽井沢は別荘地として発展した。

軽井沢駅の南の方に広いゴルフ場がたくさんある。ゴルフ好きの私は軽井沢72というゴルフ場でプレーすることがある。このゴルフ場も広く、普通のゴルフ場の6倍の108ホールもある。

どうしてそんなに広いのかというと、駅の南は南軽井沢として1921年に開発され始めて別荘地、競馬場、飛行場を作ったが湿地帯で難航し、第二次世界大戦後それらはゴルフ場になった。

現在はそのゴルフ場群の南が別荘地として開発されて南軽井沢と呼ばれている。

江戸時代の中山道の軽井沢宿の次の宿場は杓掛宿だったので、信越線の開通により杓掛駅が出来た。そして杓掛駅は1956年に中軽井沢駅に改称され、以降その付近は中軽井沢と呼ばれる。

小諸市と軽井沢町の間に御代田町がある。そこの一部が分離し1957年に軽井沢町に編入したため、西軽井沢という呼称が生まれた。現在はその御代田町まで西軽井沢と呼んでいるようだ。

群馬県の西部、国境（くにざかい）の碓氷峠の手前の地域は松井田町と呼ばれていたが、市町村合併により現在は群馬県安中市になっている。その地域には東軽井沢を名乗っているゴルフ場が2つもある。碓氷峠から15km以上も離れた場所なのに東軽井沢とは恐れ入ってしまう。

軽井沢町の北には標高2568mの浅間山があり、浅間山を越えた向こう側の群馬県の嬬恋高原を奥軽井沢と呼んでいる。確かに「奥」だが・・・、もはや名付けた人の度胸に敬服するしかない。

これで新、旧、北、南、中、西、東、奥までそろった。あとは何がつくのだろうか。

■素晴らしい別荘

北軽井沢にある先輩の別荘に到着する。

北軽井沢は軽井沢よりも標高が200~300m高く、緑も多いので軽井沢に比べて2~3°Cは涼しい。昨今の夏の猛暑においては北軽井沢の方が過ごし易いかもしれない。

閑静な赤松林に囲まれ、敷地は500坪ということで隣近所はあまり気にならない。別荘は2階建てのログハウスで、それを囲むように芝生の庭があり、昔はゴルフ練習用にバンカーやグリーンも作ったというので庭の隅に目をやると、確かにバンカーらしき跡が残っている。

中に入るとそこにはテレビや映画で見るとような“これぞ別荘”というような光景が広がっている。築20年ということだがメンテナンスがいいのか20年の歴史は感じられない。いや20年くらいの方が、木が馴染んで良い味わいになっているような気がする。

早速建物探訪が始まる。1階には台所や水回りと主寝室、大きなリビングとダイニングがあり、薪ストーブも設置されている。リビングルームは2方向から外に出ることができ、2方向ともにウッドデッキが広がっている。このウッドデッキならば十数人同時にBBQパーティが出来る程の広さで、屋根も付いているので雨の心配は無用だろう。

2階にはゲストルーム2室とかなり広いロフトがあって、ロフトも含めると2階だけで10人くらいは泊まる事が出来そうだ。

そして建物の土台部分をうまく利用して地階も作っており、結構広い。地階に降りると一段とヒンヤリとして涼しい。物置部屋、サービスルーム、シアタールームまでそろっている。さらに3畳程の広さだがワイン貯蔵部屋までもある。うまく考えた天然ワインセラーだ。

シアタールームでDVDを見せてもらう。いや聴かせてもらうというのが正しいだろう。DVDはあの懐かしいイーグルスのライブで曲目はホテル・カルフォルニアだが、エレキではなく珍しいアコースティックバージョンだ。

隣家への音漏れの心配もなく、地階なので低音の響きが抜群に良い。アコースティックギターの低音が綺麗に聴こえている。私たちは聞き入ってしまう。

皆でウッドデッキに出て缶ビールをあけて乾杯する。オーナーの先輩が自ら腕を振るってBBQをしてくれる。欧米のホームパーティではBBQはホストがゲストをもてなすイベントで、料理というよりも「おもてなし」の象徴のようなもので、食べるよりも会話や触れ合いを楽しむ。

だからなのか先輩は炭火にこだわっていないようだ。ガスボンベを使用してスピーディに準備して、焼いて、簡単に片付ける。合理的な考え方かもしれない。

私はキャンプが大好きで300泊以上しているが、いつも七輪を使っている。しかしここでは七輪や炭火は似合わないような気がする。華やかな別荘ライフには文明の利器が似合っている。

別荘ライフもキャンプも似ているようだが、別荘ライフは自然に触れながらも文明の力で快適を楽しむものだが、キャンプは自然の中で不自由を楽しむものだと思う。

むしろ別荘ライフは豪華客船のクルーズに似ている。一日中寝ていても、音楽を鑑賞しても、グルメ、読書、運動など、自然の中で文明を享受し自由に快適を楽しむことが共通点だろう。

気温はおよそ 25℃、緑に囲まれているのに虫や蚊もいない。緑と茶色の赤松の林の間から私たちが居るウッドデッキの上を心地よい風が吹き抜けていく。その風を感じながら椅子に腰かけて飲み干すビールはこの上なく美味い、そして絶妙な火加減で焼かれた肉や野菜も存分に堪能する。

このような光景はテレビや映画でよく見るシーンだが、たった今は自分たちがそのシーンを演じているのが半分信じられないのと誰かに自慢したくなるという不思議な感覚に陥る。そのたまたまなく快適な空間と時間に、私たちはすっかり別荘ライフの虜になってしまっている。

■別荘地の夏まつり

夕方からこの別荘地の夏祭りがあるというので皆で繰り出す。

夏祭りはこの別荘地の管理事務所が主催しており、恐らくは販売事務所でもあるので別荘の住民はいわばお客様になる。それゆえお客を迎えるための準備や運営には大手管理会社の若く有能な社員が当たっており、作業をテキパキとこなしている。

夏祭りの主旨がそういうことなので、四斗樽に入った日本酒が振る舞われている。

付け加えておくと四斗樽といっても満杯で四斗（72L）入るが、通常は注文者の希望により一斗か二斗を入れて販売している。それは四斗樽が豪勢で見映えが良いからだろう。

地元産らしい枝豆やトウモロコシなども無料になっている。ビールやジュースは有料だが、原価に近い価格なのが有難い。

盆踊りのための櫓が組まれており、その前で勇壮な和太鼓の演奏が披露されている。

椅子が並べられており、その椅子に座って見ている人もいれば、あえて座らず立ち見の人も多い。そしてこの夏祭り会場の特徴かshれないが車椅子で来ている人も目につく。だからといって決して高齢者ばかりではなく小さな子供たちも結構多い。そして案の定というか、子どもたちは会場内を走り回っている。

それはどこの夏祭りでも見かける光景である。しかし普通夏祭りというのは自らが参加して楽しむものだが、ここはそんな感じがあまりしない。祭りを楽しむというよりも、祭りの雰囲気を楽しむと言った方が的を射ている。

これが別荘地の夏祭りというものかと、私は感慨深く味わいながら会場を後にする。

■ふたつの滝

翌日は軽井沢の散策に出掛ける。

日本各地には白糸の滝というのが 20 本くらいあり、私の知る限り最も有名なのは静岡県富士宮市の白糸の滝だが、ここ軽井沢にも白糸の滝がある。高さ 3m、幅 70m という横に広がっている滝は、水が白い糸のように滝壺に落ちている。滝壺といっても平らな細長い池なので、水面に落ちる滝はまるでレースのカーテンが床についているように見える。

夜になるとそのレースのカーテンに光を当てプロジェクション・マッピングで様々な景色に変化させるといった特別な催しをこの夏の時期に実施している。そのことはテレビのニュースを見て知っていたが、残念ながら昼間は何もない。

ただ、浅間山の地下水が流れ落ちているのでこのレースのカーテンの周辺は非常に涼しい。

千ヶ滝という滝を目指して駐車場から 1.5km の溪流沿いの道を 30 分くらい歩いて行く。溪流は滝から落ちた水が流れており、やはり浅間山の地下水なので綺麗で冷たい。周囲の緑の木々と相まってこのハイキングはとても心地よい。こちらの千ヶ滝は高さ 20m、幅 2m と縦に長い。

■カーリング体験

軽井沢アイスパークという施設でカーリングの体験ができるというので、私も含めメンバー全員はカーリング初心者だが面白そうなので参加する。

受付で防寒着と靴と手袋と帽子を借り、リンクに入るとそこはもう別世界だ。それはそうだろう軽井沢とはいえ真夏の正午頃なのでかなり暑い、しかしここは防寒着を着ないといけない程の寒いスケートリンクだ。このギャップに私たちは皆感激して、そしてワクワクし始める。

そんな私たちにはインストラクターの青年が付いてくれてイロハから教えてくれる。彼はまだ幼さが残るほどに若い、丁寧に分かり易く教えてくれる。準備運動や転び方に始まり、投げ方、掃き方、そしてルールまでも教えてくれる。

靴を履く。この時に私はカーリングの靴は左右が違うということを初めて知る。利き足の靴底には滑り止めが付いているが、利き足でない方の靴底はツルツルの滑り易い素材になっているので、慣れるまでは氷上を立っているのもままならない。

直感的にカーリングというスポーツは、滑ることと止めることの攻防なのだと理解する。

ルールは 4 人ずつ 2 チームで行われ、目標の直径 3m 程の円をめがけて両チーム交互に 8 回ずつ約 20kg の石（ストーン）を投げての円の中心により近づけたチームに得点が入る。

まだルールどころではないが、それでも最後にはミニゲームまでやるという。本当にゲームなんかできるのだろうかと思ってしまうが、体験は容赦なく進んで行く。そして進めば進むほどこの競技の難しさが分かってくる。

ストーンを投げる時に弱い回転をかけると、速度が落ちるにしたがい自然に曲がって（カールして）いくのでカーリングと呼ばれる。投げたストーンの前の氷面を掃く、いや擦る（スイープ）ことで、到達距離を延ばしたり曲げたりできる。

私はスイープする理由をストーンの前を単に綺麗に掃除するためと思っていたが、強く高速で擦ることで氷を融かし滑り易くすることだと初めて理解する。やはり何事もやってみないと分からない。

それゆえ「強く高速」が非常に重要なファクターで、だからスイープは本当に疲れる。

スイープすることでどのくらい距離を調整できるのかとインストラクターに聞くと、男性選手ならば 3m くらい調整出来るという。そのために目標の円の直径も 3m くらいなのだろう。

競技で投げる距離は 30m くらいだが、今回は体験なのでその半分もない。それでもストーンを目標目掛けて投げるのは相当に難しい。これは思っていたよりも奥の深い競技だと実感する。

それでも皆老体に鞭打って何とか最後のミニゲームまで行い、60分の初体験を終えた。そして参加したメンバー全員は大満足している。

このカーリング体験は真夏の軽井沢だからこそ参加したが、これが真冬ならばどこでやっても参加しなかったような気がする。

そう考えるとやはり人間は贅沢な生き物だ。自然環境に文明の利器を持ち込んで快適に楽しむという意味においては別荘ライフによく似ている。

■旅の記録

実施は2019年8月10日（土）～11日（日）の2泊3日で、参加メンバーはオーナー含めて合計10人、交通手段は乗用車2台に分乗して行ってきた。

費用の合計は一人当たり約13000円で、一人当たりの費用の内訳を以下に示す。安くあがった最大の理由は宿泊費がかからなかったことで、やはりオーナーの先輩に感謝だ。

往復の交通費 約6000円

食料と酒代 約4000円（夕食・朝食）

カーリング体験 3630円（60分体験コース2380円、防寒着などレンタル1250円）

別途昼食代の支出あり